

「対人援助について」 —社会福祉専門職としての視点—

(公社)京都市身体障害児者父母の会連合会
「じゅらく」「せせらぎ」「ぷらり」久門 誠

ご了解をお願いします

- 児童領域の専門職ではありません
- 人の存在や命や社会にかかわる内容に触れる中でそのことが自分のことや自分の身近な人などにあてはまるなどで辛い思いをすることがあるかもしれません
- 社会福祉の価値（大切にすべきこと）を話す中で、私（久門）個人の思いが反映するところがあります・その意味で「正解」ととらえず、違和感や批判的な視点も大切にしてください。
- 質問や意見も歓迎します（グループワークの発表時など）
- ご存じのことでもあるかもしれませんが、失礼お許しください
- フォントが不ぞろいですがお許しください
- 資料もありますが基本スクリーンをご覧ください（すべてのスライドを印刷していません・データ希望される方は研修後にお声掛けください）

本日の構成（予定・進行状況により適宜変更します）

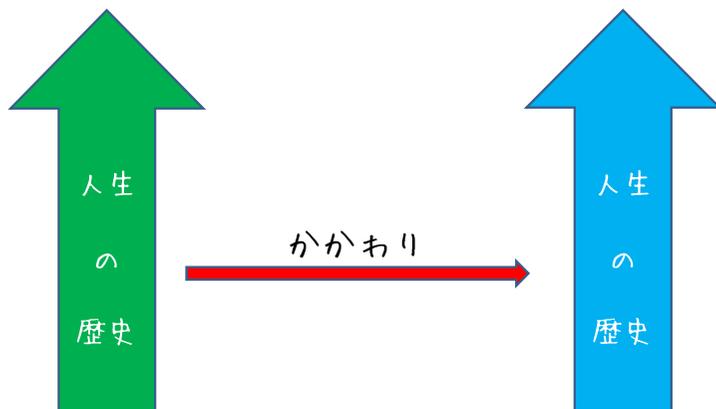
- 導入と小講義（30分）
- アイスブレイクとワーク1（個人ワーク→2人組→グループ共有）（30分）
- 小休憩（10分）
- 小演習（15分）
- 小講義（20分）
- 個人ワーク→グループワーク→全体共有（35分）
- おわりに（5分）

一通の投稿「障害者の親として」

親が安心して「ありがとう。そしてさようなら」と、この世を旅立っていける、平和で福祉が充実した時代になるよう努力しなくてはと思う。

- 「親亡き後」という言葉
- 「この子より1日だけ長生きしたい」という言葉

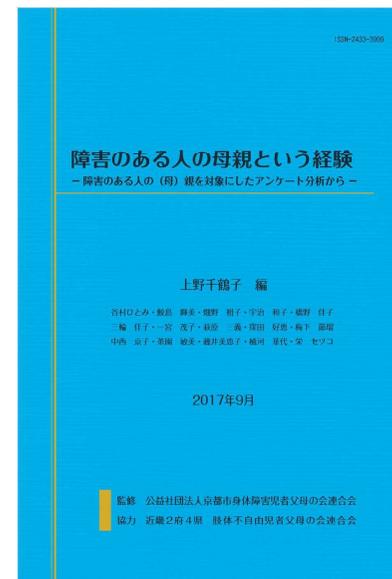




社会福祉の仕事は

人々の毎日の生活を支える地味な仕事
 結果がすぐに見えない苦しい仕事
 自分自身の人間性を問われる厳しい仕事
 心を傷つけ、傷つけられる痛々しい仕事
 自分を押しつけたくなる危険な仕事
 一人ではどうにもならない果てしない仕事

(月刊福祉に掲載された福祉施設職員の詩より)

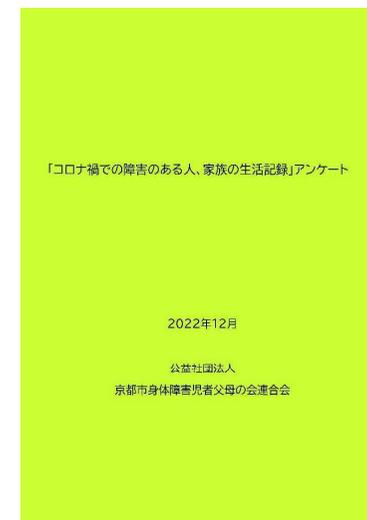


[http://kyoto-fubo.or.jp/wp-content/themes/jyuraku/images/pdf/201709_houkoku.pdf ...](http://kyoto-fubo.or.jp/wp-content/themes/jyuraku/images/pdf/201709_houkoku.pdf...)

表7 総データ件数及びデータの分散

データ件数		自分	仕事	子ども	きょうだい	大	親族	医療	教育	コミュニティ	行政・ケースワーカー	制度・法律	特になし	計
		肯定票	402	14	350	34	16	31	9	15	178	29	2	21
否定票	375	97	381	65	35	59	23	41	122	90	90	4	1382	
中間票	7	3		18		2	4				18	3	55	
計	784	114	731	117	51	92	36	56	300	119	110	28	2510	
カテゴリ数	肯定	30	4	17	15	9	9	3	3	11	6	1	108	
	否定	27	8	23	11	19	22	5	6	7	19	22	169	
	中間	3	2				1					4	10	
	計	60	14	40	26	28	32	8	9	18	25	27	0	287

6頁より引用



私が心掛けていること

- 「様々な役割があること」を想う
- 「ご本人のことを「話せる」相手は限られる」ことを想う
- 「比べてしまうこと」があることを想う
- 話を「聴く」
- ご本人のことを肯定的に伝える（何か否定的なことを伝えるときは間に挟む）

『支援の葛藤』『つきあい続けていくことは、ある意味本当にしんどさを感じることである』
（P318、下線は久門）

（以下私感）
・同じような（かかわるのが難しい）ことを続けられることのしんどさ（「教科書」には書いてない）

- ・人を傷つけることは自分も傷つける
- ・言い訳をする・したくなる

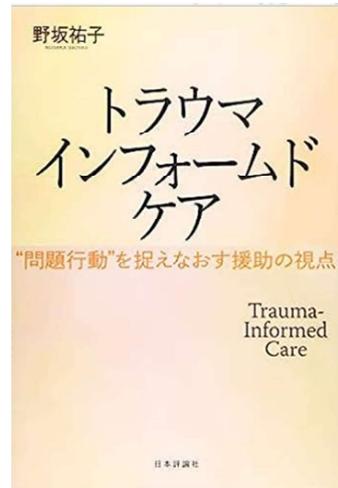
「一人では取り組めない」
「つながりの中で回復していくこと」
「語ること」「共有すること」

・楽しいことやうれしいこともあり、また支えあえることもあり、かろうじてバランスをとって、何とか綱渡りのように現場で働いていた感覚



2018 青土社

(参考)



熱意なき知識は離陸せず、
知識なき熱意は墜落する

京都新聞

「弱さを絆に」 (向谷地生良)

- その人の命・歴史・背景を想う
- 葛藤（失敗）とともにあること
- それでもかかわり続ける（空閑浩人）

ワーク1

- 個人ワーク(メモ作成)(3分)
- テーマ「ちょっと話したい仕事のこと」
 - 愚痴OK・ただしあまりに深刻なものは避けてください
 - うれしかったこと・楽しかったことでも是非
 - 演習内でも「専門職としての秘密保持」「個人情報への配慮」
- 2人組で「話す・聴く」(役割交代)(5分×2)
- 簡単に、感想などグループ共有(8分)

振り返り

- 私たちの多様な価値観
- 「正しい」ことは人・時代・社会によってしばしば異なる
- 立場が変わればものの見方が変わる
- 価値観はものさし・価値観は様々・価値観は作られる
- 価値観は変えられる（こともある）
- 多様性の尊重は社会福祉の大切な原則⇔葛藤を伴う
- 民間企業でも「ダイバーシティ経営」
- 自己覚知の大切さ

2014

ソーシャルワークのグローバル定義

「ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。

社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。

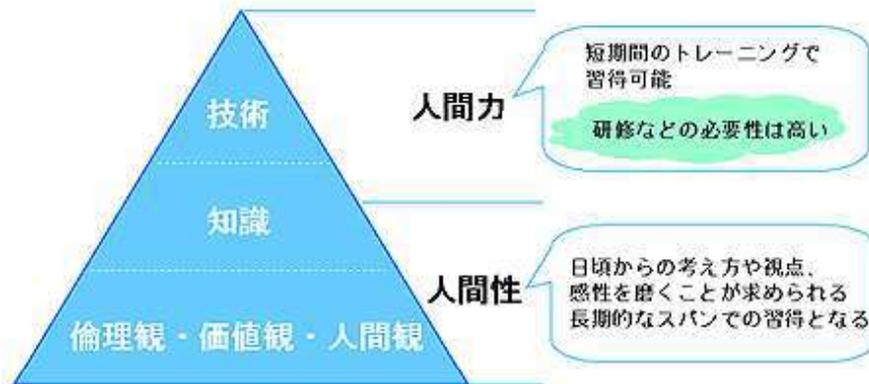
ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。

この定義は、各国および世界の各地域で展開してもよい。」

(社会福祉専門職団体協議会国際委員会+日本福祉教育学校連盟による日本語定訳)

Powered by
NPS Office

日本社会福祉士会資料 https://www.jacsw.or.jp/06_kokusai/IFSW/files/SW_teigi_kaitei.pdf 21



画像引用「介護・福祉の応援サイトけあサポ(荒木 篤)」

<https://www.caresapo.jp/fukushi/kihon/shigotojutsu/83dn3a000000ht6x.html>

「夜と霧」

- 彼女はちゃんとした資格のあった看護師であったにも拘らず、このような残虐を行いました。(中略)今になって思うと、私や囚人だった私の友を最も痛めつけたのは、墮落し、自分の義務を忘れ去った医者や看護師を見ることだったのです。

ヴィクトール・フランクル1961『夜と霧』P65(解説箇所)サルヴェーゼン夫人の証言より

- かけ【価値】どれくらい役に立つか、またどれくらい大切かという程度。またその大切さ。ねうち。
- かけかん【価値観】物事の価値についての、個人(または世代・社会)の基本的な考え方
- りんり【倫理】①人倫(人間の秩序関係。転じて人間の実践すべき道義)のみち。道義。(人のふみおこなうべき正しい道)
- 岩波国語辞典第4版(1987)より

対人援助職の価値と倫理

価値…大切にすべきこと (迷った時の) 拠り所・振り返りの基準
 倫理…その道筋・進み方

社会福祉専門職としての諸原理と葛藤

- 人権尊重
- 社会正義
- 多様性の尊重
- 集団的責任

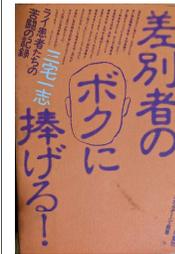
13歳の長男に何度も聞いた、同じ質問を、みなさんにさせてください。

子どもは親を選べません。なのに、まずしい家に生まれたというだけで大学や病院にいけない子どもがいます。そんな社会は「公正」な社会ですか？

生まれたときに障がいがある子がいます。それだけの理由で、一生、いろんなことをあきらめなければいけない社会が「公正」な社会ですか？

うちには3人の娘がいます。女の子として生まれたというだけで、出産を理由に大好きな仕事をやめなければいけない社会は「公正」な社会ですか？

教えてください。自分が当事者だったら、不運な側だったら、この不条理を「しかたないでしょ」ですませられますか？ 僕は願っています。社会から「公正さ」が失われていることへの気づきが「不条理への怒り」につながることを。(22P)



(三宅一志1978晩聲社)



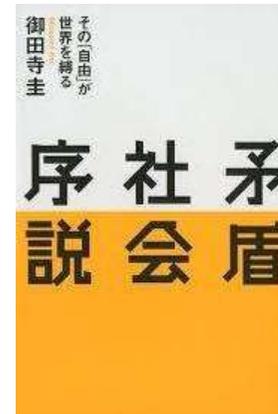
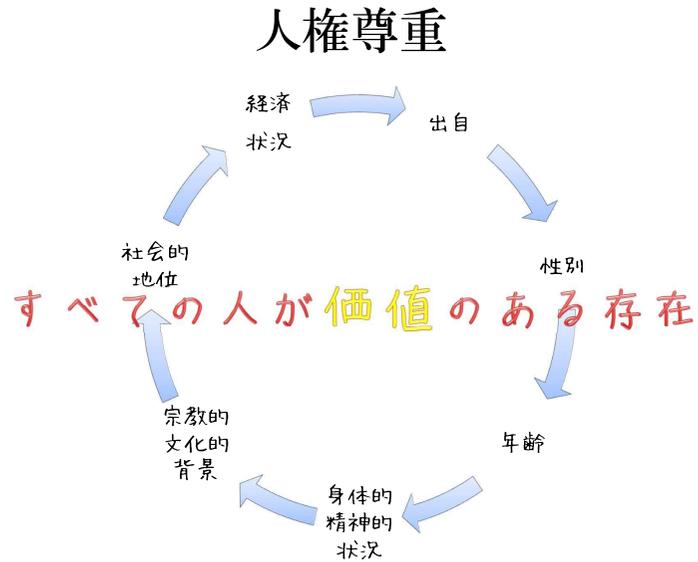
(キム・ジへ2021大月書店)

「内なる差別意識を問え (p289)」 (三宅一志, 1978)

時代は変わっても、「私」を問うことから

差別は私たちが思うよりも平凡で日常的なものである。固定観念を持つことも、他の集団に敵愾心を持つことも、きわめて容易なことだ。だれかを差別しない可能性なんて、実はほとんど存在しない」(65頁) (中略)

私たちはつねに主流であるわけではない。国籍で、人種や民族で、宗教で、性別で、経済状況や健康状態で、いつでも他者化され、自分も気づかないうちに差別の加害者と被害者のあいだを簡単に行き来する。この当たり前の事実気づくには、きっかけが必要だ。私たちが生涯にわたって努力し磨かなければならない内容を、『差別されないための努力』から『差別しないための努力』に変えるのだ」(202頁) だれかを差別しない可能性はほとんど存在しない。そのため私たちは、「差別をしないための努力」を学ばなければならない。(訳者(伊恰景)あとがきより)(キム・ジへ, 2019)



(2018) イーストプレス

Big black dog syndrome 「かわいそうランキング」

- クモやヘビのような生き物より、シロクマやパンダといった愛くるしい動物たちの保護にお金は集まる
- 近くのホームレスより、遠いアジアやアフリカの貧困に生きる恵まれない子どもたちの屈託のない笑顔のためにお金を届けたい
- 無縁社会は問題だが、他人の意に沿わない不快なアプローチをする人間は社会的に糾弾され排除されるべきだと考えてしまう



人権感覚は更新する必要がある



(2021 紀伊国屋書店)

- 「叱る」ことの本質は、不安と恐怖で人をコントロールすること。学習して行動変容することについての効果はほぼなく、弊害は大きい。
- 「叱る(誰かを罰する)」ことは脳内報酬を高める。依存性がある。
- 日本社会は随所に「叱ることが必要」とする文化があり、意識更新が必要
- 「叱る人」を「叱って直そうとする」のは本末転倒 (上記久門による本書の一部概要)

「叱る依存」が発生した場合、第一の被害者はどう考えても「叱られる人」です。彼らは本来の「学ぶ機会」や「のびのびと生きる機会」を奪われ、ただひたすらに目の前の苦痛から逃れることに心が占拠されてしまいます。しかもその影響が、長期にわたって続くのです。「叱られる人」にとっては悲劇と言ってもよい状況です。

けれど「叱る人」の主観的な体験は違います。叱る人にとって、被害者は自分自身であり、「叱られる人」こそが加害者だと感じる逆転現象が起きるのです。(中略)自分は「正しいこと」を主張し、状況を「あるべき姿」にしようとする課題解決者なのだと感じようになるのです。すると叱る人にとって、問題の責任は何度言っても同じことを繰り返して困らせる、目の前の叱られる人にあることとなります (kindle位置855)

「でも、多様性っていいことなんでしょ？学校でそう教わったけど？」

「うん」

「じゃあ、どうして多様性があるとややこしくなるの？」

「多様性ってやつは物事をややこしくするし、けんかや衝突が絶えないし、そりゃないほうが楽よ」

「楽じゃないものがどうしていいの？」

「楽ばかりしていると、無知になるから」

と私が答えると、「また無知の問題か」と息子が言った。以前、息子が道端でレイシズム的な罵倒を受けたときにも、そういうことをする人々は無知なのだとながわしたと言ったからだ。



「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」
ブレイディみかこ (2019) 新潮社,P59

多様性を語ることは、やさしい。
多様性を生きることは、むずかしい。

でも私たちはそのように世界を進めてきた。
むずかしさを引き受けて生き、
たのしさ・ゆたかさに転化していきたい。
この子どもたちが私たちの先生である。
(湯浅 誠)

映画「バベルの学校」HPより
<http://unitedpeople.jp/babel/rv>

一人のせいにしてない・させない・できない
「集団的責任」ということについて

現代のことば

インビジブルなミス

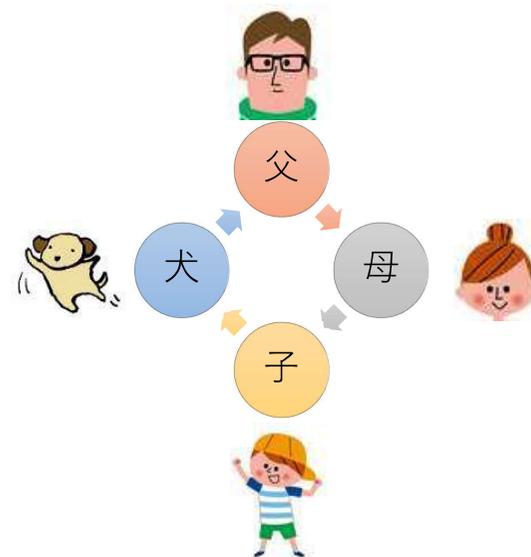
平尾 剛

2018年10月11日 京都新聞

「ミスをしてはいけない」という言葉は、私たちが生きていく上で、無意識のうちに身につけてきた。ミスは、失敗の代名詞として、否定的な意味で使われる。しかし、ミスは必ずしも悪いこととは限らない。むしろ、ミスは成長の機会である。ミスをした後、どうしていいのか、どうすればいいかを考えることが、成長の鍵となる。ミスをした後、自分を責めないで、前を向いて進むことが、本当の強さである。

「システム理論」

- 個人や家族、社会をシステム（互いに影響を与え合う要素で構成された集合体）として捉え、システムのもつ独自の特性や力を活用して問題を解決する方法。

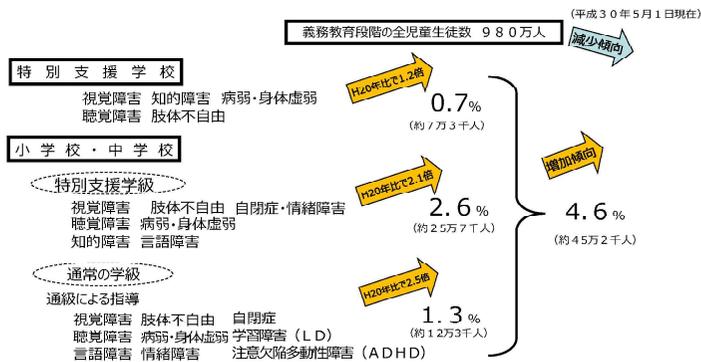


おわりに...私が心掛けていること

- 弱い自分を許して大切にすること・お互いの弱さを支えあえるように努力すること（葛藤ばかりですが）
- 吐き出して、上を向くこと（専門職として学び続けること）
- ちいさくても、具体的なことを

以下参考資料(研修では使用しません)

特別支援学校等の児童生徒の増加の状況



「昭和」→「平成」「令和」



(2020) イースト・プレス

- 「行儀よさ」や「コミュニケーション能力」がより求められるようになった
- 「発達障害」「精神疾患」とされる人が増え、医療や福祉・教育がそれをサポートしている
- 人とつながらない自由を得た半面、承認の機会も減り、積極的に求めなければ得られにくくなった
- 人とつながらない自由・都合の良い情報を選べる自由の中で、分断は当然である

余白も大切にしたい

何でもカテゴリー化して制度を作っていくだけでは、制度に乗りきらない人たちが永遠に生み出され続けていくことになります。首尾よく乗れた人も窮屈を感じるんじゃないでしょうか。メニューがそろって自己選択できるのだけど、いったん選択するとそれに従わざるを得なくなるような圧迫感があります。障害者の自立生活運動では「施設から地域へ」がスローガンだったのに、窮屈な施設から飛び出した先の地域が“施設化”していた、という感じです。

一言で言うなら「揺らぎが無くなった」「揺らげなくなった」ということでしょうか。そしてそれは、世の中全体に着実に浸透しているような気がします。ガチガチに固定されているシステムは、揺らぐことができる「余白」、その場の状況に応じた選択・決定を可能にする余地や余裕がないために、リスクが高く、効率も悪いものです。「揺らぎ」がなくてはイノベーションも起きません。こういった「揺らぎ」や「遊び」という要素をどう維持していくかというのが、今後世の中のことを考えていく上での重要な課題になっていくだろうと思います。

https://www.tokyo-jinken.or.jp/publication/tj_56_interview.html

熊谷晋一郎（インタビュー「**自立は、依存先を増やすこと 希望は、絶望を分かち合うこと**」(TOKYO人権 第56号 (2012 (平成24)年11月27日発行))



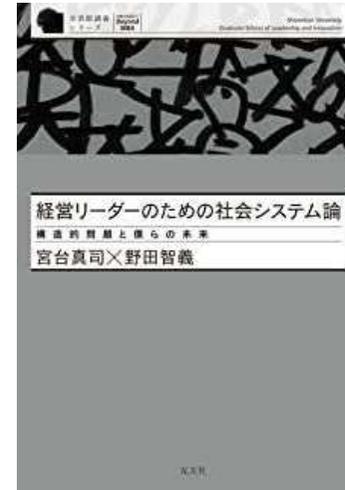
(2022 ちくまプリマー新書)

「共同体的な凝集された親しさという関係から離れて、もう少し人と人との距離を丁寧に見つめ直したり、気の合わない人とでも一緒にいる作法というものをきちんと考えたほうがよいと思うのです。」(P123)

「識者と呼ばれる人たちは、必死になって対話や相互理解の重要性を訴えています。しかし、現実の社会は、呼びかけとはほど遠い状況にあります」

「人それぞれ」や多様性を重視する論者は、「人それぞれ」や多様性という考え方に、対話を阻害する作用があることも意識すべきでしょう。自主性と個の尊重ばかりに目を向けるのではなく、社会としてつながりに頑健さをいかに取り込むか。そのことをもっとしっかり議論すべきだと私は思います」(P130)

「迷惑をかけないよう、あるいは、場の空気を乱さないよう自らを律することのできる人は、たしかに立派です。しかし、それと同時に、おたがいに迷惑をかけつつも、それを笑って受け容れられるつながりも同じくらい大事だと思います」(P135・下線は久門による)



(2022 光文社)

「共同体には必ず維持コストがかかります。メンバーの間で時間と手間をかけて合意形成をしなくてはなりませんし、互いのまなざしを意識せずには生きられないという不自由を受け入れなくてはなりません。共同体からいいものだけを引き出し、コストをかけないという「いいとこ取り」はできません。つまり、「絆には絆コストがかかる」のです」(P71)

「社会は「つまみ食い」ができません。システムのよさを享受しながら、昔ながらの共同体のよさも享受したいと願うのは当然ですが、「いいとこ取り」ができないのが社会の厄介なところ」(P72)

「任せて文句を言うのではなく、引き受けて考える」というのが、共同体自治の本質だからです。」(P222)